

相模原殺傷事件1年

神奈川県相模原市の重度障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が元職員の男に殺害された事件から1年が過ぎました。事件をどう考え、私たちはどういう社会をめざしたいのか。全盲と全ろうの重複障害がある福島智・東京大学先端科学技術研究センター教授（バリアフリー分野）に聞きました。安川崇記者

全盲ろうの東大教授 福島 智さん

ふくしま・さとし=1962年兵庫県生まれ。83年に東京都立大学（現・首都大学東京）に合格し、盲ろう者として初めて大学進学。社会福祉法人全国盲ろう者協会理事、世界盲ろう者連盟アジア地域代表。著書に『ぼくの命は言葉とともにある』（致知出版社）など

取材は、福島さんの意思疎通手段である「指点字」を通じて行いました。記者の質問を通訳者が耳で聞き、6点からなる点字を指で福島さんの指の上に打って伝えます。それを読み取った福島さんは、耳が聞こえていた時の記憶を頼りに、声で答えてくれました。

（9歳で視覚を、18歳で聴覚を全て失った福島さん。盲ろう者として世界で初めて常勤大学教授となりました）

事件を知った時に私は、植松被告にどこかを刺されたような感覚を持ちました。知的、精神、身体などの障害のある人は、共通

して感じたかと思いきや、弱者が外を歩くときの前提は、暴力を向けられないという信頼感です。その前提が揺らいでしまったからです。

植松被告は、意思疎通が難しい入所者を選んで襲ったとメディアは報じました。「誰かが憎い」では

ありません。重度障害がありコミュニケーションが難しいという条件が当てはまれば無差別に殺そうとした人も、その人の人生も、好みも、家族も、どう

でもいい。もはや人間として見ていません。入所者一人ひとりのかけがえのない、いわば「実存」を殺したんで

生きていくためのものに意味がある

どんなに障害が重くても意思疎通が全くできない人はいない



通訳者による「指点字」で対話する福島智教授

相模原事件から1カ月後に津久井やまゆり園を訪れた福島智教授。ユリの花に手を触れ、「この花は事件を覚えていた」と感じ、昨年8月26日、神奈川県相模原市



す。生命を奪ったという点にどこまでまらない、重く深い罪だと思えます。

植松被告は院議長のあての手紙に「障害者を安楽死に」「理由は世界経済の活性化」と書きま

した。生命を奪ったという点にどこまでまらない、重く深い罪だと思えます。

植松被告は院議長のあての手紙に「障害者を安楽死に」「理由は世界経済の活性化」と書きま

した。生命を奪ったという点にどこまでまらない、重く深い罪だと思えます。